

『ついに会わなかった恋人たち』

曾野綾子

ついに会わなかった恋人たち

曾野綾子 (作)

今年六月二十五日、アメリカでは、マイクロソフト社の創業者ビル・ゲイツを一位とする世界の資産家の中で二位にあった投資家のウォーレン・バフェットが、私財三百十億ドル(約三兆六千億円)をゲイツ夫妻の財団に寄付すると発表し、これによって六百億ドルを上回る規模の新財団が生れた。二人はほぼ半々くらいのお金を出し合ったことになる。この超国家的力を持つ人道団体の出現は、その力が金にむらがる各地の「人間ハイエナ」の餌食にならなければ、大きな力を発揮するだろう、と言われる。新財団の基金は、アメリカの年間ODA(政

府開発援助)の予算の五倍に当たるといふから痛快である。幾つかの裏話も紹介された。ゲイツは以前には、慈善事業などに全く興味を示さない男だった。それを「心配した」のが夫人メリンドの父、つまりゲイツの岳父で、彼がバフェットにゲイツを人間として滋味のある人物になるよう、教育を依頼した。その結果ゲイツは変わり、そのことを喜んだバフェットが今度はゲイツの財団に自分の資産の約八十五パーセントをさし出すことにした。バフェットには、既に亡くなった夫人が設立した慈善団体があるというから、その関係者たちはバフェットが亡くなった後には、遺産が寄贈されることを望んでいただろうに、バフェットは自分の名前も冠されていないゲイツの財団を支援したのである。こうしたことは、神にさえ知られてはいらばいいことなのだ。

こうした超富裕階層が蓄積した金を余剰な稼ぎと見るか、当然の報酬と見るかは人によって違おうだろうけれど、人間は或る程度以上に金は要らないという単純な真理が証明されたようでおもしろい。どんなに金があってもご飯を日に十度食べたら病気になる。イタリア人は「人間は一度に二枚の服は着られない」と言うのだそうだ。金を蓄積し過ぎると、その金を遊びに使うにしても、その管理のために時間と心を取られてしまう。しかもこの世には、金や物以外のすばらしいことがありすぎるのだ。そして自分の儲けた金を、税金として国家にその使用方法を任せるのではなく、自分なりの使い途で社会に還元したいという人が最近多くなって来たのは事実である。

それは私が働いている海外邦人宣教師活動援助後援会という小さなNGOでもはつきりと出ている。この後援会は、私が三十五年前に、韓国の善良な出版社にちょっとした嫌がらせをしたのがきっかけでできてしまった組織である。その頃から、私は「人を見たら泥棒と思う」といって、途上国支援のお金を相手国の政府はもちろん民間組織にも渡すようなことはせず、使い手を日本人のカトリックの神父と修道女たちに限定したのだが、それが長続きするもどになったのである。

お金を集まり始めたら、責任が生じるから勝手にやめられない。その間に私は日本人の素顔の一つを発見していた。日本人は地味で「慈善事業」するのには表現が向いていないが、ゲイツとバフェットほどではなくても、その難型のような人々は実にたくさんいたのである。私たちのNGOは、NPOにもしていないし、それによって免税の特典もないから、経済効果を当

てにする会社からの寄付は一件もない。すべてが個人の「惻隱の情」によって贈られて来るものばかりだから、不景気にもかかわらず続いで来た。金銭的な実利は全くなくとも、与える側に廻るといふ心の変化が人を強めているように見える。それに報いるために、私たち運営委員会も、完全なボランティアで働くことにした。すべての費用は自分持ち、通信費、交通費、会合費などは一円も会の予算から落とさず、公認会計士にもただ働きをしてもらってやって来たのである。

寄付の額がその心の証ではないが、遺言による寄付は、九十一歳の元看護師だった女性からの妻として生きた日本女性からの七百万円余りのものもある。未だに贈り主のわからない一千六百万円は、写真の簡易アルバムに入れた額面百万円の割引債